2025 年の大阪万博に関する勉強会

「万博における造園界のかかわりについて考える」

20180726　15：15～16：30

於：ドーンセンター

一般社団法人公園管理運営士会会長　糸谷正俊

NPO 国際造園研究センター副理事長・NPO 社叢学会副理事長

㈱総合計画機構相談役・㈱公園マネジメント研究所経営顧問

一般社団法人公園からの健康づくりネット理事長

1．万博とは何か

・定義

・歴史

・2025 大阪万博の性格は

2．1970 日本万国博覧会(大阪万博)

・決定までのいきさつ

・テーマをめぐって

・会場計画の経過

・建設エピソード

・運営状況

・造園関係者の関与とその後

・跡地利用について

3．1995 国際花と緑の博覧会(大阪花博)

・決定までのいきさつ

・テーマをめぐって

・会場計画の経過

・造園関係者の関与とその後

・跡地利用について

4．2005 年日本国際博覧会（愛・地球博　愛知万博）

・出展者として参加

・出展内容と評価

５．2025 大阪万博への期待

・転換期の万博という性格

・いのち輝く未来社会とは

・造園家の活躍の舞台は

添付資料

資料１　「国際花と緑の博覧会（1990）に学ぶこと」シンポジウム報告

関西造園界 50 年の歩み　編集　公益遮断法人日本造園学会関西支部

資料２　花博の理念を継承した大阪らしいまちづくりを推進

ひと・まち・緑　Winter2005 No.4　㈶大阪市公園協会

資料３　安全で快適な会場の環境づくり・流動調査等に携わって

国際花と緑の博覧会　花博植栽管理記録集成より　作成委員会代表　鷲尾金弥

「国際花と緑の博覧会（1990）に学ぶこと」シンポジウムの報告

Report of the Symposium about the Achievement of The International Garden and Greenery Exposition, Osaka, Japan, 1990

糸谷　正俊*
Masatoshi ITOTANI

1．はじめに

平成27年1月31日（土）午後1時から午後5時まで，「国際花と緑の博覧会に学ぶ」という講演会が大阪市鶴見緑地内花博記念ホールで開催された。プログラムは，第1部講演会と第2部パネルディスカッションからなり，合わせてシンポジウムの形式をとったので，ここではシンポジウム報告として記載する。

この事業は日本造園学会関西支部設立50周年記念事業と国際花と緑の博覧会開催25周年記念事業の合同事業として開催されたものであり，また大阪市，（一財）大阪スポーツみどり財団も主催者として参加し，（一社）ランドスケープコンサルタンツ協会関西支部の協力も得て行われた。参加者は，造園学会員をはじめ，造園各界の関係者，花博開催当時の担当者，大阪市の都市緑化に関係する市民の皆さんほか，多様なメンバーが集い，会場は熱気にあふれたものとなった。

2．講演の概要

講演者は，宮崎研一氏（元大阪市建設局花と緑の推進本部長），松本守氏（フジテレビ総合開発局特区事業室），大塚守康氏（㈱ヘッズ取締役会長）のお三方であり，それぞれ大阪市の立場，国の立場，民間の造園コンサルタントの立場を踏まえながら，花博誘致，会場建設，博覧会運営等についての経過説明とともに，花博の成果，花博の遺産といった事柄についても，講演いただいた。

最初の講演者である宮崎氏は，花博誘致を起案した大阪市の責任者の一人として，また花博協会が設立されたのちは計画建設部長，施設管理部長として，会場建設と博覧会運営に関与され，花博事業全体の中心的役割を担われた。講演内容は，初めになぜ鶴見で国際花と緑の博覧会を企画したかについての背景説明として，花博誘致の動機が大阪市市政100周年事業であったこと，また，博覧会場を新規に整備するには時間の制約があるため，既存大規模公園である鶴見緑地に白羽の矢を立てたことを挙げ，さらに国際博覧会としての開催準備や諸手続き等についての経過説明が行われた。なにしろアジアで初めての国際園芸博覧会であり，スタートを切るまでの悪戦苦闘や，既存公園を活用することの地元対応など，苦労の続く毎日であったことがうかがわれた。

講演の後半は，博覧会場の計画と整備についてであり，会場計画が決定するまでのいきさつや，開会に間に合わせなければならない会場整備の進行管理，そして開会後の安全対策など，40分という短い時間であったが，臨場感あふれた話であった。

続いて松本氏は，国（建設省）の立場から，国際園芸博覧会としてのスタート段階の経緯について話があり，大阪市と2人3脚での国際博の承認や，事業計画と資金計画の決定の紆余曲折などが語られた。特に国の担当を建設とするか，農水でやるか，という所管省庁を決めた経過など，霞が関の攻防は初めて聞く事柄であり，花博の裏面が垣間見えて非常に興味深かった。

松本氏はやがて建設省から花博協会に出向し，計画建設部と企画調整部で会場建設や博覧会運営に携わることになられたのであるが，その間の多くのエピソードが披露され，当時の熱気が生き生きと思いだされたものであった。

講演者最後の大塚氏は，会場計画や会場建設を推進する民間サイドの技術責任者であり，その立場から，会場計画の経緯，会場整備の工夫の数々が語られた。特に会場計画を決定するにあたって，従来の建築・都市計画主導の会場づくりではなく，花博らしい造園家による会場設計に苦労されたことについて，筆者は当時大塚氏をサポートするポジションにいたので，そのご苦労を思いだしつつ，拝聴した次第である。

大塚氏の講演では，パワーポイントを使って美しい会場環境がステージに次々に映し出され，観衆の多くに当時の感動を呼び起こすとともに，花博を知らない世代にも花博会場の斬新さ，すばらしさを体感させるものであった。

3．パネルディスカッションの概要

講演の終了後，若干の休憩時間を経て，第2部パネルディスカッションが行われた。コーディネーター役の筆者は，はじめにディスカッションの進行について，パネリストである3人の講演者に確認し，その後，各講演者に対する会場からの質問・意見への対応という形で議論をスタートさせた。

話題・テーマとしては，時系列としては逆になるが，①花博会場の跡地利用の問題，から議論し，②会場計画策定までのいきさつと会場コンセプトが決まるまで，③花の導入，演出について，④花博のテーマ「自然と人間の共生」

*㈱総合計画機構相談役／㈱公園マネジメント研究所経営顧問／（一社）公園からの健康づくりネット理事長

について，⑤花博の事業マネジメント，⑥花博から学ぶべきこと，というような枠組みで，順に話を進めた。この間，③花の導入，演出については，当時花博協会の植物管理課長であった三浦頼彦さんから，当時の厳しい花管理状況について会場から御発言いただいた。また⑥花博から学ぶべきことについては，花博の基本計画委員であった京都大学名誉教授中村一先生から適切なアドバイスとともに，とくに委員であった漫画家の手塚治虫氏とのやりとりが披露され，鶴見緑地を子供たちにとって楽しい公園としていくことが大切，との意見を頂戴した。

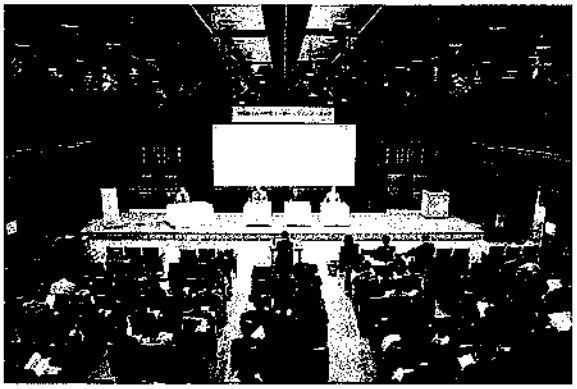
すべてのディスカッションの経過をここに記す紙面の余裕はないので，⑥花博から学ぶべきこと，を中心に，主要な意見・提案を発言順に以下にまとめた。

大塚氏からは，花博で展開した会場演出の手法，特に花を花壇として見せるだけでなく，緑や水や園路とともにデザインすること，これが具体的には「花の谷」の花のデザインであり，大園路の水路や広場の環境デザインとして観客に感動をもたらしたことを指摘し，このデザインの開発とその後の展開が，花博の第1の大きな成果であったこと，また第2に，会場づくりの様々なプロセスで，造園家が中心でありつつも都市計画，建築，土木，園芸その他，最先端の技術者との交流が生まれ，その後の環境デザイン技術の発展とランドスケープ世界の拡大に寄与したことが大きい，とのコメントがあった。

これに対し，松本氏からは，たしかに花博以降，屋上緑化など花と緑の技術は格段に発展したが，残念ながら造園家が中心的役割を担ったかは疑問である，花博の成果が緑関係者にどう活かされたかについては，さらに検証すべき，との厳しい指摘があった。さらに松本氏は，花博会場であった鶴見緑地の現状を見ると，もっとも遺産となるべき国際庭園などの保存活用の状態は不十分であり，大阪市だけでなく花博記念協会の取組みも必要ではないか，という問題提起もなされた。

宮崎氏は，1990年当時ゴミの埋立地の公園でまだ借地も残っていた鶴見緑地が，花博会場となることですばらしい公園として今残っていることこそ，最大の博覧会遺産であると指摘する一方で，国際庭園跡地など，良い管理運営が続けば利用者も増えるが，管理運営などが悪くなると批判も出てくるという危惧も語られた。大阪市公園部局のOBとして，また花博会場生みの親の一人として，鶴見緑地という公園のマネジメント面での厳しい状況の克服が課題，との認識が示されたものと筆者は考えている。

パネルディスカッションの最後にあたり，講演者3名から会場参加者，特に若い人や市民の方々に向けたメッセージをいただいた。宮崎氏からは，緑化は多くの市民が関わる分野であり，緑や花を増やし美しくするとともに，これを慈しみ，また多くのボランティアの方々の努力に敬意を表する，という市民の心の啓発が求められていること，松本氏からは，若い造園人は自信を持ってもっと発言していくべきとの指摘，そして大塚氏からは，公園という造園家の聖地だけにとどまるのでなく，公園的な発想を持って積極的に街全体に飛び出そう，という叱咤激励があり，討議は終了した。



写真－1　講演者によるパネルディスカッション

4．総括

パネルディスカッションのコーディネーター役であった筆者は，シンポジウム全体についても以下の総括を，会の締めくくりとして行ったので，これを本報告のまとめとしたい。

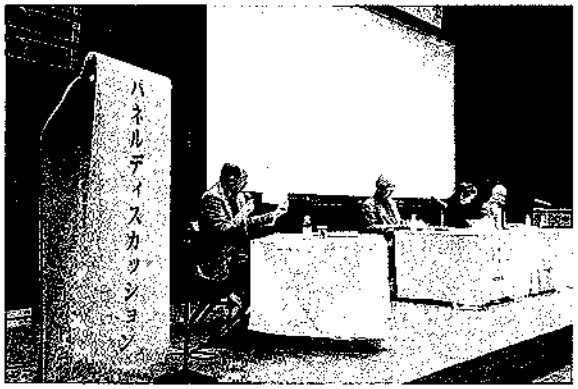
①造園家が中心となって花博事業を成功させたことは大いに誇ってよい。

②この体験を原点として，その成果や遺産を若い人に着実に引き継ぎ，これからの時代に必要な都市づくり，環境づくりに果敢に挑戦すべきである。

③花博当時から時代が変わり，基本理念の一部など現状にそぐわない面も見受けられるが，「自然と人間との共生」というテーマは一層重要性を増しており，造園家の活躍が社会から求められている。

④市民の皆さんも，当時の中曽根首相の「産業都市大阪で開かれる花博の経験を地球村の道しるべにしよう」というメッセージに応えて，使命感を持って都市緑化に継続的に取り組んでほしい。

⑤25年前の造園界の花博シンポジウムが本日のシンポジウムの底流にあることを踏まえ，2040年の花博50周年に，花博の理念や成果がどのように花開くか，期待して見守りたい。



写真－2　コーディネーターによる総括

参考文献

1）（公社）日本造園学会関西支部（2015）：「国際花と緑の博覧会（1990）に学ぶこと」講演会記録集

2）（社）日本造園コンサルタント協会（1991）：花博の会場計画とデザイン―JLCA取組みの記録

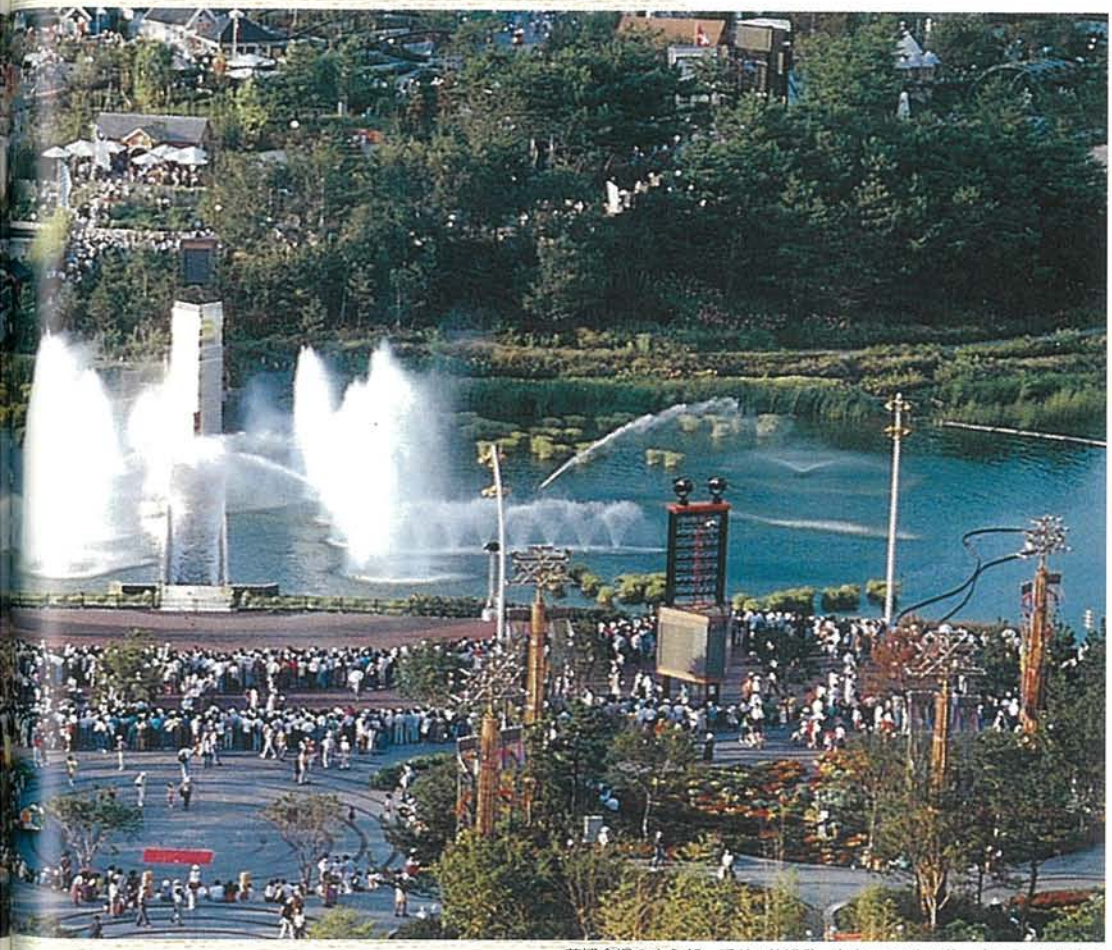
OPINION

花博の理念を継承した大阪らしいまちづくりを推進

1990年春、国際花と緑の博覧会（花博）が鶴見緑地で開会しました。開期中2、300万人余の入場者が訪れ、多くの成果を生んだとされる花博。以来15年、さまざまな課題を抱える大阪のまちづくりに、今こそ花博の基本理念を生かした都市緑化の取り組みが求められています。

（株）総合計画機構　代表取締役
（社）ランドスケープコンサルタンツ協会　理事
糸谷 正俊

「プロフィール」いとたに　まさとし
京都大学農学部出身
京都造形芸術大学非常勤講師（ランドスケープ法規）、造園設計事務所、シンクタンクを経て1983年建設コンサルタント（株）総合計画機構設立。国際花と緑の博覧会会場計画を（社）ランドスケープコンサルタンツ協会の一員として担当。
NPO法人社叢学会理事、NPO法人国際造園研究センター理事。
著書に「市民参加時代の美しい緑のまちづくり」経済調査会（共著）、ほかがある



花博会場の中心部一手前：花桟敷、中央：いのちの海、向こう：国際庭園

地球環境時代の私たちの生き方を提起した花博

世界各国が一堂に会して、各国の物産、技術、文化を展示し、様々な情報交流を行う催しである国際博覧会は、1851年ロンドンのハイドパークで開かれた万国博覧会を起源としています。この万博は、18世紀からヨーロッパの技術先進国で行われていた産業展示会的な催しをはじめて国際的な次元で開催したものであり、博覧会の性格も産業振興にとどまらず、技術の見本市、知識交換の場、大衆への啓発と教育の場という新しい役割を付与したものでした。

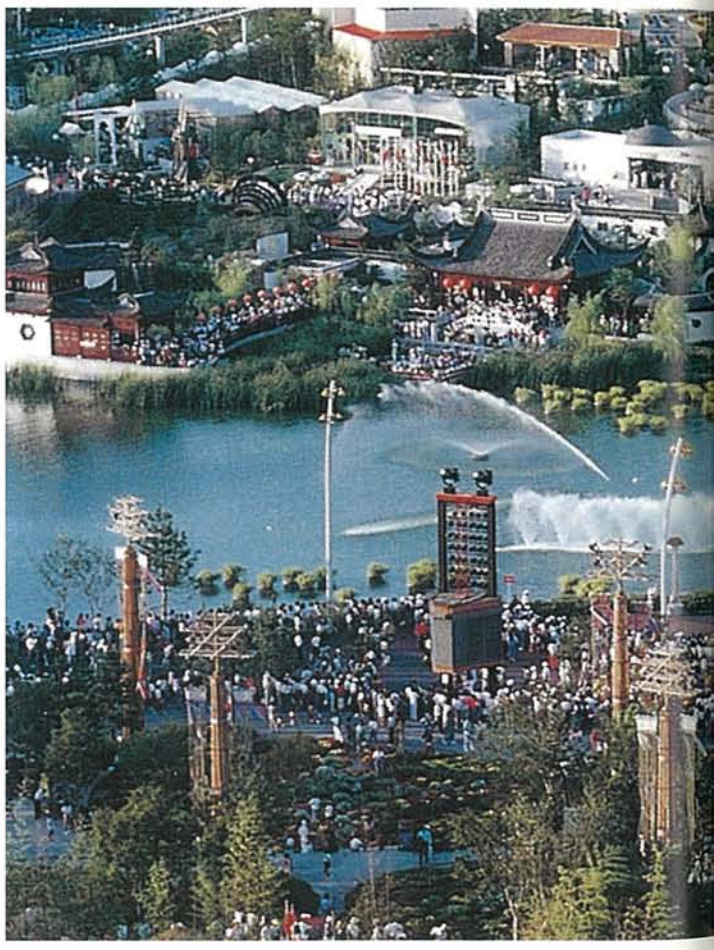
この万博では、ヨーロッパやアメリカなど約40の国の参加をはじめ、600万人の入場者があるなど成功裡に終わりますが、開催背景にはイギリスの近代工業社会の進展と、新世界やインドから吸収した多くの富があったといわれています。

ロンドン博以後、先進国は競うように万国博覧会を開催し、ニューヨーク、パリ、ウイーンなどで次々に行われていきま

す。近代化に遅れた日本も、1867年のパリ博には早くも江戸幕府のほか、薩摩藩、佐賀藩が個別に出品し、1873年のウィーン博には明治政府が出展するなど積極的に参加して、日本を国際的に知らしめるとともに海外文明の吸収に努める機会としてきました。

そして1928年には国際博覧会条約が結ばれ、この条約に基づく国際博として日本では、東京で1940年に開催する計画であった万博は戦争により断念したものの、アジアではじめての万博が1970年に大阪で開かれ、その後沖縄海洋博(1975)、筑波科学技術博(1985)と続き、したがって1990年の国際花と緑の博覧会は、日本では4番目の国際博ということになります。

19世紀半ばから20世紀末に至る150年の間には、国際博覧会の位置づけもだんだんと変わってきました。技術文明の交流博覧会の性格が強かった19世紀のヨーロッパ型国際博は、20世紀になると国の威信をかけた近代化競争の様相を呈し、ヨーロッパとアメリカが互いに国力と最先端技術を競い合う場と化します。しかし、二度の世界大戦を経て後は、ヒューマニズム(1958、ブリュッセル)、宇宙時代の人(1962、シアトル)、理解と平和(1964~65、ニューヨーク)、人間とその世界(1967、モントリオール)という各博覧会テーマが示すように、人類と世界のあり方を展示し情報提供する、人間博、情報博へと変化してきます。



20世紀後半に行われた日本の国際博も、「人類の進歩と調和」をテーマとした大阪万博をはじめ、この流れの中にすべて位置づけられるものです。そして20世紀末に行われた花博は、20世紀の国際博を総括するとともに、「自然と人間の共生」というテーマのもとに地球環境時代の人類という新しい視点を提供した博覧会として、新世紀への橋渡しを見事に果たしました。この視点は、今年愛知県で行われる万博(愛・地球博)のテーマ「自然の叡智」にも繋がっています。

ちまた(巷)の中に生命讃歌を表現した花博会場

花博の基本理念は、すばらしい未来の創造に向けて今何をなすべきかという問題提起を、私たちに美しく格調高い言葉で投げかけました。語られたのは、それこそ地球環境問題から生命科学の問題、さらには都市文明・都市生活から人としての暮らしの処し方まで幅広く、重要な課題が溢れています。

この理念の継承と実現については、国際花と緑の博覧会記念協会が中心となって現在もさまざまな事業が継続され、現代社会の発展に役立てられています。

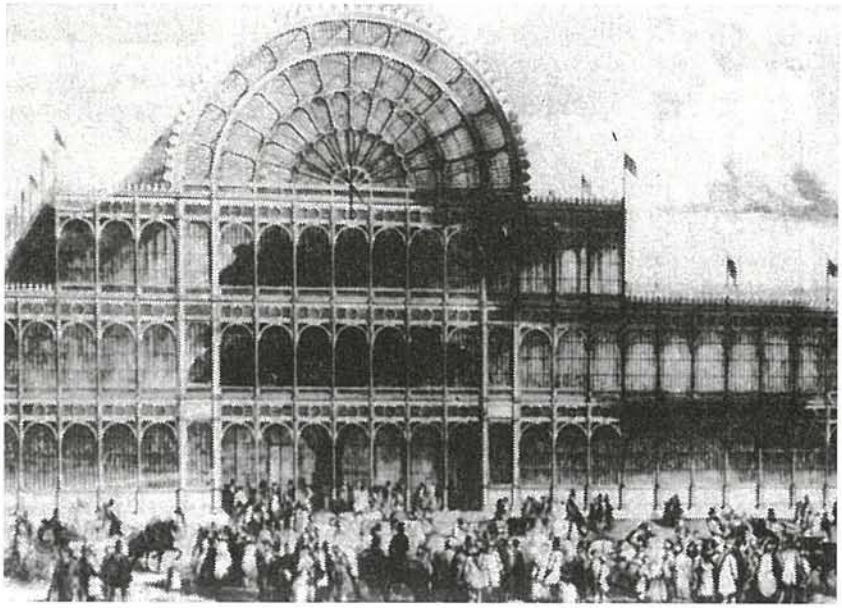
私は当時、花博会場計画立案の責任者の一人でした。そこで、会場計画を策定した立場から花博の理念を検証するとともに、21世紀の都市づくり、大阪のまちづくりに生かすべき事柄についての私の考えをお示ししたいと思います。

前項で国際博覧会の歴史を少し振り返りましたが、会場づくりの面でも、国際博は次々と新しい技法を取り入れて、世界の都市開発に大きな貢献をしています。その中で忘れてはならないのがランドスケープアーキテクト(造園家)の役割です。

第1回万博のロンドン、ハイドパークでは、会場建設により公園内のニレの木が失われることから反対運動が起き、会場整備が行きづまるという事件がありました。そこで登場したのがランドスケープアーキテクトのジョーセフ・パクストン。彼は、公園の現状を生かしてニレの大木を切らずに屋内にそのまま取り入れた温室パビリオンを創り上げ、脚光を浴びます。この建物はクリスタルパレス(水晶宮)と呼ばれ、万博のシンボルとなり、また以後の公共施設整備の手本ともなりました。

その後の会場計画でも、1893年シカゴのジャクソン公園で開かれた「世界コロンブス博覧会」ではアメリカのランドスケープアーキテクトの祖といわれるフレデリック・ロー・オルムステッドが主導し、会場計画の思想と技術は、自然を活用した都市計画、都市美運動のさきがけとなりました。

日本では、博覧会の会場計画は建築や都市計画分野の人々が担当することが多いのですが、花博は日本で初めてランドスケープアーキテクトが手がけた会場となりました。会場の雰囲気も、従来の大規模造成によって新たに近代的で合理的



パクストン設計の水晶宮（改訂版万国博覧会より）

な都市空間を創り出すものとは異なり、自然の摂理に基づき、丘、野原、池、街が織りなす、花と緑と水にあふれた、美しくてどこかなつかしい風景が楽しめる田園的おもむきに仕上がりました。この会場づくりのコンセプトは、その後の淡路花博や浜名湖花博にも基本的に受け継がれ、さらにいろいろな都市においても、花と緑を取り込んだまちづくりのイメージを示したことにより、都市緑化や園芸が盛んになるきっかけとなったのです。

花博の基本理念は、都市の内部に花と緑のふるさとを創造する必要性を指摘し、このため、自然を愛し、自然を畏敬し、生命を祭る場所と仕組みを、ちまたの中にこそつくらねばならない、と謳っています。

この理念を受けて私たちランドスケープアーキテクトが花博会場で表現したのは、高密度な都市空間の中にも生き物と共存できる環境を実現することであり、まさに21世紀に求められる都市像を人々の前に具体的に示すことだったのです。

花博会場となった大阪では、花博の理念をまちづくりに生かす取り組みが続けられていますが、その取り組みの重要性は増すことはあっても、いささかも減じるものではありません。

花博をベースに大阪の花と緑のまちづくりを考える

それでは大阪のまちは、花博以降花と緑が増えたのか、と聞かれるとはたと困ります。

全国的には生花や花苗・植木を提供する園芸店が増え、イングリッシュガーデンがブームになるなど、花博の成果があったと言われていますが、大阪の都心や住宅地で具体的な成果が見られるのはまだまだ先のことのようです。

大阪で花と緑のまちづくりを進めていくには、大阪という都市の成り立ち、歴史性を踏まえる必要があります。

大阪のまちの地形は上町台地という小さな細長い台地を除くと、ほとんどが草地でしかなかった沖積平野。そこを埋め立てて都市が拡大したのですから、もともと台地や段丘が多くて、また歴史的にも大名庭園など緑のストックに恵まれている東京や、東山、北山、西山の三山に囲まれ市街地内にも神社仏閣の緑の蓄積がある京都、六甲を抱き邸宅やニュータウンの新しい緑の多い神戸などに比べ、緑の量を比較してもこれは対抗するのが無理というものです。

緑の量ではなく、緑の質、緑の文化という点から、大阪の都市緑化のあり方を捉えることが大切です。以下、三つのこれからのあり方を提起します。

〔第1　市民が愛する、質の高い花と緑の文化拠点をつくる〕

ニューヨークもビジネスの街であり、映画やテレビで見る限り、中心地は活気に溢れているものの緑豊かな雰囲気はあまり感じられません。しかし、映画「オータム・イン・ニューヨーク」では、恋人同士が紅葉した公園で語らいながら散策するシーンがすてきです。もちろんこのデートの場所は、かのオルムステッドが設計したセントラルパーク、市民に心から愛され、市民の心のふるさと、緑の文化拠点となっている公園です。

大阪にもセントラルパークに匹敵する大阪城公園や中之島公園それに長居公園

おおさかフェアの主会場となる大阪城公園

などがあります。でも市民の愛し方は、セントラルパークには及びません。

大阪城公園などを花と緑の文化拠点として、市民のふるさととして、もっと愛されるように質を高める必要があります。その際、花博で実証されたランドスケープアーキテクトのプラニング技術、デザイン力が大いに役立つものと思います。また、来年春に大阪城公園を主会場として予定されている「全国都市緑化おおさかフェア」の開催と、これも来年5月に市内で行われる世界バラ会議が、拠点づくりの一つの契機になるものとして期待されます。

〔第2　住民と企業が、自ら花と緑のまちづくりを進める〕

もともと大阪は、御上に頼らず自らまちづくりに取り組むという歴史を持った土地柄です。江戸時代、小規模な町奉行所はありましたが、町の自治は住民組織に任されていました。近代では大阪城の復元、戦後の大阪城公園の緑化が市民からの寄付でまかなわれています。地下鉄御堂筋線も、地下鉄沿線の立地企業の資金的協力があって実現しました。

緑化リーダー等市民が活躍している花壇づくり（都島区内）

自分たちの町は自分たちの手で良くする、という大阪人の誇り、気概は、独特の大阪文化が支えてきたものです。花と緑のまちづくりも、御上のご意向ではなく、自分たちのまちづくりの一環として、自立的に取り組むことが一番です。

幸い花博以降、市内各区には緑化リーダー、グリーンコーディネーターと呼ばれる花緑のプロフェッショナルの方々がおいでになり、活躍の場を求められています。また、先駆的な屋上緑化（なんばパークスなど）や敷地緑化（OBPなど）等の企業の緑化も盛んです。さらに大阪および関西圏には、たくさんのランドスケープアーキテクトや緑化関連企業が活動しています。

こうした民間の人的資源やノウハウを生かし、自主的な花と緑のまちづくりを推進することが大阪らしい都市緑化を実現することになります。

〔第3　小さな花と緑を慈しみ、笑顔の広がる町内にしていく〕

花博会場計画にかかわっていた頃、こんな話を聞きました。国際園芸家協会（AIPH）の偉い方々が博覧会準備伏況の視察のため大阪にお見えになった時、市内の小さな住宅、路地に花や緑がきめ細かく育てられていることに非常に感心した、というのです。ちっぽけな都市空間でも、創意工夫で美しい花壇になる、というわけです。この路地裏園芸やベランダ花壇は、高密度に暮らす大阪ならではの緑化手法。拠点づくりとともに、身の回りの小さなところから花と緑を育てていくこの伝統技術を深め、市内各地に広げていくことが重要です。

帝塚山などの一部を除き、都市計画でいう低層住居専用地域を持たない大阪で、郊外ニュータウンのような緑の多い住宅緑化は不可能です。

小さな花と緑を路地、玄関口、窓際、ベランダなどに持ち込み、できればご近所で相談しながら通りすべてが美しく調和のとれたデザインとなるように工夫し、町全体の緑化につなげていく。これが花博理念で語られた、ちまたに花と緑のふるさとを生み出すための具体的な方法の一つです。

町全体を美しくするためにはどんな花や木を植えればいいの？その育て方は？というような疑問には、緑化リーダーやグリーンコーディネーターが的確に答えてくれるはずです。

都市を緑化し、緑を増やすことはすばらしいことですが、大阪には大阪のやり方があると分かっていただけたでしょうか。小さな花と緑を慈しみ、そのこぼれ花や実生をご近所で分けて、どんどん増やしていく。その過程で、ご近所付き合いが密になり、町にコミュニケーションが広がり、笑顔が増えていく。安全で安心できる住みよい美しい町が育てられていく。これが本来の花と緑のまちづくりの目的であり、大阪的な都市緑化、花緑文化の目標である、と考える次第です。

皆さん、今日からでも花博の地、大阪らしい花と緑のまちづくりに取り組もうではありませんか。

花がかざられた路地（天王寺区内）

〈参照〉
NHKブックス477「改訂版万国博覧会」吉田光邦
平凡社「世界大百科事典」博覧会の項
「花博の会場計画とデザイン」平成3年9月（社）ランドスケープコンサルタンツ協会編

安全で快適な会場の環境づくり流動調査等に携わって

株式会社総合計画機構
代表取締役副社長　糸谷　正俊

計画段階の安全、合理性を追求

(社)日本造園コンサルタント協会は昭和61年8月に花博の仕事をするプロジェクトチームをつくった。私はこの「プロジェクト室」に参画し、会場計画を立案する業務に就いた。

この時点では、基本構想だけができていて、会場計画はまったくの白紙状態であった。計画立案のメンバーは、駒井氏、小島氏、長谷川氏等であった。

当社は建設・造園コンサルタントで、国土計画や地域計画、観光・リゾート、そのほか産業経済、行政、財政の開発計画などを手がけている。このため、花博では観客動線計画や流動調査などの部分を担当することになった。つまり、会場が安全で、観客がスムーズに流れるかどうか、合理的な土地利用を行っているかどうかをチェックする、という観点からの計画参加である。

コンセプト決定までには、紆余曲折があった。第1次計画がまとまっても、土地利用については毎日のように変更があった。花博協会としては、できるだけたくさんの国からの参加を望んだが、発展途上国は経済上の理由で、大国は経済摩擦などの問題を反映して、なかなか参加国が決定しなかったからだ。

「2千万人の入場」の根拠

花博会場に2千万人の入場者がある、という前提で会場計画を行ったが、その根拠の一つになるのは、過去の博覧会である。筑波の科学博は、会場敷地50～60ヘクタールに対して、2千万人。ポートピアは20～30ヘクタールで、1.6千万人。いずれも期間は180日間強である。

今回の花博は、管理用地などを除いた実際の会場敷地が70ヘクタール。科学博に比べて、交通の便がよいことから、2千万人は確実、と推定できた。根拠のもう一つは、前売り券の販売状況である。瀬戸大橋博や科学博等のデータから、1千万枚の前売り券を売りつくせば、少なくとも2千万人の入場者を予測しても間違うことはない。だから、私をはじめ、実際のプランニングをしていたメンバーは、2～2.5千万人のワク内で会場づくりをした。従って、1日の計画対象となる入場者は22万人。この数字はずばり的中した。もっとも、的中したというより、その方向にもっていったという方が正確かもしれないが。

収容と流動の2点をチェック

22万人/日で、絶対に安全で、快適な環境を用意する、ということを目的に計画が進められていった。会場に22万人の人が入ったときに、パビリオンに何万人、庭園に何万人、そして園路を歩いている人が何万人いるかを想定して、それぞれに収容できるかどうか、次に混み合う個所はないか、という流動を調べる。この収容と流動の2点で、問題があれば、土地利用を変えていく。例えば、道を広くする、広場を設ける、といった具合である。

花博が終わって、最大1日37万人が殺到したときも、スムーズに人が流れた、ということで、われわれの仕事はどうやら及第点がもらえたと思っている。

もちろん、問題も残した。個人的に「辛い」と感じているのは、民間パビリオンの取り扱いである。長蛇の列ができ、私が期待したほどの収容力がなく、入場者に不満足感を与えた点である。

維持管理計画も受け持つ

会場計画のあと、花の維持管理計画にも携わることになった。私自身は花に関する経験や知識がなく、適任者とは思えなかったが、「花を知りすぎた者が管理計画をすると、かえってシステム的にならないのではないか。花を知らない者の方がうまくいく」という話があり、ついノセられたのだ。

この管理計画の趣旨は、植物管理を一本化し、会期中、どう維持管理をしていくか、具体的にシミュレーションをしていこうというものであった。

しかし、どこから手を付けていいかわからない。仲間からのアドバイスで、東京ディズニーランド、長崎のオランダ村、建設省の都市緑化フェアなどでそれぞれ実績のある業者さんに話を聞きに行った。例えば、東京ディズニーランドの場合は日比谷花壇さん、第一園芸さん等を訪ね、維持管理の上でどういう問題があるか、どういうふうに展開しているかなどを聞いた。このリサーチで、管理計画をどう立てるべきかが見えてきたので、基本方針の作成にかかった。

その第一は、管理センターをつくろうという主張であった。現場の決済を花博協会の植物管理部に委ねると、どうしてもタイミングがずれる。指揮命令系統が乱れるのではないかという意見もあったが、実際に夜中に行われる作業の指示を協会に仰いでいるわけにはいかないという必然性があった。

そして定期管理、ローテーション、災害対策の3つの管理計画をつくることを提唱。このほか大きなストックヤードを至急につくること、管理要員の確保などを、基本方針として定めた。この段階で、毎日の花の水やりの仕組みや回数など、管理手法も決めた。

花博を終えて

花材料は、都市環境の材料として導入するのは非常に難しいという定説がある。コストが高く、生き物であるために扱いが難しいからである。都市を花と緑でいっぱいにする、というのは理想だが、かなり時間はかかると思う。

しかし花博を契機に、われわれの価値観を変え、少しずつでも都市に、花・緑を増やす方向に進んでいくことが望まれる。すべては「これから」である。

万博における造園界のかかわりについて考える

平成３０年７月２６日

一般社団法人　公園管理運営士会
会長　糸谷正俊
NPO国際造園研究センター　NPO社叢学会
㈱総合計画機構　㈱公園マネジメント研究所
一般社団法人　公園からの健康づくりネット

万博の定義

・18世紀から19世紀半ばにかけて工業化が著しく進展したヨーロッパ各国（フランス、オーストリア、ベルギー、オランダ、ロシア、ドイツなど）で、技術の見本市、知識交換市場となる産業振興型の国内博覧会が開かれる

・当時最も進んだ工業国であり、世界の海上を支配していたイギリスは、さらに国威を発揚し、国際的地位を確固たるものとするため、第1回万国博覧会を開催（1851年ロンドン、ハイドパークが会場）

・その後欧米各地で万国博覧会が開催される（1851～1898年までに13回）。

・20世紀にはいっても欧米各地で開催が続き、条約にて規定

・国際博覧会条約に基づく登録博覧会（10年に一度）が万博

参考資料「改訂版万国博覧会　吉田光邦著　NHKブックス」ほか

Ⅰ　大規模な国際見本市（技術文明謳歌・国威発揚）
- ・第１回　1851ロンドン万博　パクストンのクリスタルパレス
- ・第４回　1862ロンドン万博　日本の伝統工芸品出品
- ・第５回　1867パリ万博　「幕府」「薩摩」「鍋島」が参加
- ・第６回　1873ウィーン万博　日本政府公式参加
- ・第１１回　1889パリ万博　エッフェル塔
- ・第１２回　1893シカゴ万博　オルムステッドの会場計画

Ⅱ　ヨーロッパからアメリカ主導へ（技術力誇示・芸術性付与）
- ・第１５回　1904セントルイス万博　史上最大規模490ha
- ・第２２回　1933シカゴ万博　条約に基づく国際博「進歩の世紀」
- ・第２４回　1937パリ万博　芸術と技術博　ゲルニカ

Ⅲ　テーマを持った人間博・科学技術と平和博・環境博
- ・第２６回　1958ブリュッセル万博　「科学技術とﾋｭｰﾏﾆｽﾞﾑ」
- ・第２９回　1967モントリオール万博　「人間とその世界」
- ・第３０回　1970大阪万博　３２回1975沖縄　３５回1985筑波　３８回1990大阪花博

Ⅳ　２１世紀は、地球博・理念提唱博覧会
- ・第４４回　2005愛知万博　「自然の叡智」
- ・第４６回　2010上海万博　「より良い都市、より良い生活」
- ・第４９回　2015ミラノ万博　「地球を養う、いのちのためのエネルギー」

2025大阪万博に求められるもの

技術文明博（国・企業が競う）20世紀半ば
↓
文化・生活・人間・平和博　20世紀後半
（多文化共生、暮らしと科学）
↓
地球環境・生命賛歌博　21世紀
（・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・）

1970大阪万博決定までの経緯

1．1963年1月4日大阪商工会議所の新年祝賀会において、大阪商工会議所の前会頭杉道助氏（当時）が提案し、大阪府知事左藤義詮氏（当時）とともに誘致運動をスタート

2．1964年4月23日大阪府が日本政府に万国博開催の要望書を提出（この年、東京オリンピック）

3．1964年11月4日政府が閣議で日本万国博開催誘致を正式決定

4．1965年4月3日政府が会場を大阪・千里丘陵に決定※1

5．1965年9月14日、日本での開催が決定

6．1966年5月11日、博覧会国際事務局の理事会が日本の提出した一般規則、一般分類表を承認し、正式に第1種博として開催することが登録される。

※1　当初南港案もあった　神戸案も有力だった

（一般規則とは、会期、参加国などの義務、外国政府の参加招請方法など博覧会の性格や運営方法などを定めたもので、日本万国博の一般規則は、9章50条からなっている。一般分類は、博覧会に展示できる品物の種類を細かく分類した表で、56部門320項目に分けられている。日本万国博覧会(EXPO'70)は戦後3番目の第1種一般博覧会となる。戦後1番目は1958年のブリュッセル万国博、2番目は1967年のモントリオール万国博。）

テーマ「人類の進歩と調和」

誰がまとめたか？

・公式には協会設置の「テーマ作成委員会」だが、キーパーソンは桑原武夫京大教授、梅棹忠夫（当時大阪市立大学助教授）、小松左京、加藤秀俊（京大人文科学研助手）

・「進歩」は世界が信じるテーマだが、東西対立が続く世界の平和的共存には「調和」が重要、との意

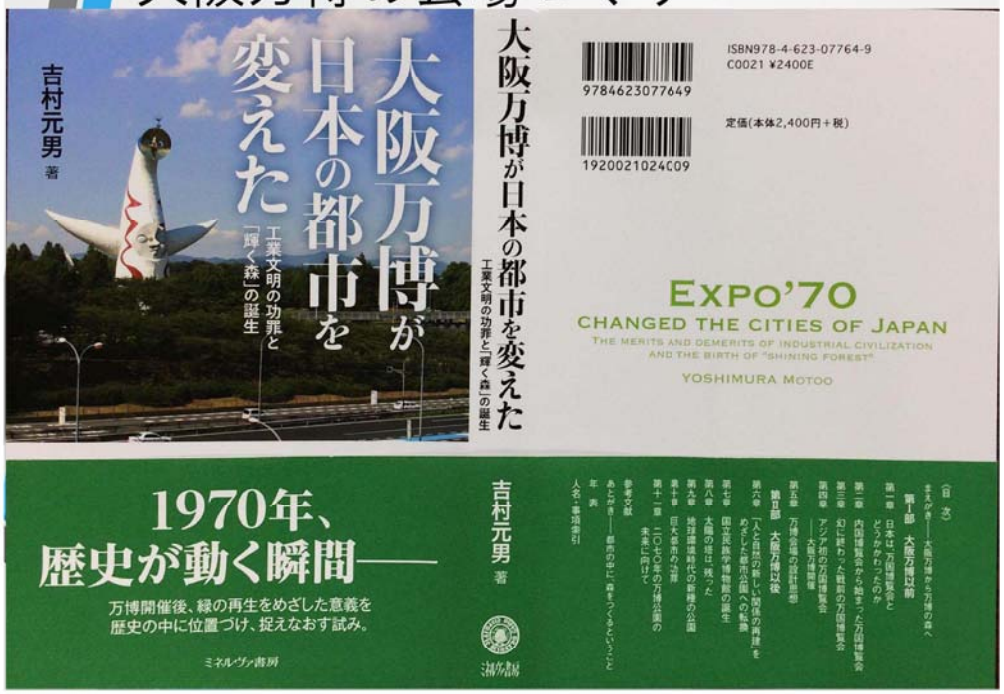
・若き知識人が勝手連的に万博支援（政府・協会とは緩い協力関係）

・建築・都市計画も若手が躍動

・シンボル・テーマ館の実現には彼らが力を発揮

資料出展　日本経済新聞２０１０年３月１８日「今なお息づく大阪万博」第１回から

大阪万博の会場づくり



大阪万博の記録（フレーム）

名称　日本万国博覧会

種類　国際博条約に基づく第１種一般博

期間　１９７０年３月１５日～９月１３日（１８３日間）

会場　大阪府吹田市千里丘陵　３３０ha

総入場者　６，４２１万８，７７０人（うち外国人１７０万人）

参加国　７７か国　４国際機関

会場建設費　５２４億円（出展物除く）

会場運営費　３５４億円

関連事業費　６２４億円（７．０００億円という数字も）

収支　　１６０億円の黒字

造園界のかかわり

1．会場計画に学識者が参加（京大グループ）
2．建設省　「日本庭園設計委員会」設置
3．大阪府　万博会場を都市公園（広域）として計画決定
4．コンサルタントは？
・1964　建設コンサルタント登録制度始まる
・1967　万博の政府出展のひとつとして日本庭園の建設決定
・1967　日本造園設計事務所連合結成
・1967　㈳日本公園緑地協会が日本庭園の基本・実施設計受託
・日本庭園ほかの会場造園の設計には関与していない
・日本庭園主任設計者田治六郎氏、技術監督は役所からの出向
5．造園建設業界（阪神造園建設業協同組合からみて）
・1965　２５社で阪神造園建設業協同組合設立
・1968　共同企業体を構成して万博工事に参入
・1968以降　万博会場造園工事、日本庭園植栽工事・石組工事
・1971　造園会館に事務所移転

1990大阪花博決定までの経緯

当初「大阪市制１００周年記念事業」として花の博覧会を大阪市が企画、1989年鶴見緑地でヨーロッパの国際園芸博覧会をイメージ。ただ国際博となると国が主催することになる。また、国際博は1985科学技術博の５年後、ということで、1990大阪花博の開催フレームが決まった。1984年10月の中曽根内閣による「緑の3倍増構想」が背景にあった。

1．1984年11月大阪市長が建設大臣に花博開催の陳情
2．1985年8月日本造園建設業協会AIPHに加盟、1990A1の開催承認
3．1985年9月政府が閣議で国際花と緑の博覧会のBIE開催申請了承
4．1985年12月BIE総会で1990大阪・国際花と緑の博覧会開催決定

会場計画・設計・管理運営
（造園コンサルタントから見て）

1．主催者である国際花と緑の博覧会協会からCLAが受託
2．CLA関西支部各社が設計・監理に関与
3．基本計画までは、花博会場計画事業室が対応
（大塚、鷲尾、糸谷、駒井、西辻、柴田ほか）
4．会場設計の基本コンセプトは「モンスーンアジア」
5．若手技術者は設計・現場監理に奔走
6．花は設計とともに管理運営計画にも関与
7．花と緑のまちづくりの未来を示した会場デザインを実現
8．しかし、この経験を生かす場は・機会は少なかった

基本理念とテーマ

基本理念　山崎正和起草
・地球は青い惑星、生命の神秘
・いのちを支える緑、花はいのちの賛歌
・自然を愛し、自然を畏敬し、生命を祭る場所と仕組みをちまたの中に
・公園は雑踏に耐える花と緑の提供を
・現代人は緑の前に身を慎み、-----新しい園遊の作法を
・日本は大胆な実験を試み、地球社会の平和と繁栄に貢献

テーマ
・「自然と人間との共生」

大阪花博の記録（フレーム）

名称　国際花と緑の博覧会

種類　国際博条約に基づく第１種特別博

　　国際園芸家協会（AIPH）承認のA１(大規模国際園芸博覧会)

期間　１９９０年４月１日～９月３０日（１８３日間）

会場　大阪市鶴見区と守口市に跨る鶴見緑地　１４０ha

総入場者　２，３１２万６，９３４人（うち外国人？万人）

参加国　８３か国　５５国際機関

会場建設費　３６０億円（出展物除く）ほかに公園整備費１２０億円

会場運営費　４２２億円

関連事業費　１，９００億円

収支　　１００億円程度の黒字？　現在記念協会の基金１０８億円

造園界のかかわり

1．博覧会運営・会場計画づくりに中心的に参加
（理念づくり＜有識者＞、会場計画・設計＜コンサル＞、
施工＜造園建設業界＞、国際会議の運営も行う）
2．建設省　国際花と緑の博覧会事業室設置（農林水産省関与）
3．国・大阪府・大阪市・民間　国際花と緑の博覧会協会に出向
4．コンサルタントは多忙を極めた
5．造園建設業界が施工および管理運営に大活躍
6．花卉・園芸業界の興隆、花の庭づくり技術の向上
7．造園・園芸の産官学が博覧会事業の中心的役割を果たした
（添付した資料を参考にしてください）

2025大阪万博造園界のかかわり方

（時代性）
・転換期の万博をどうとらえるか
・訴求力のあるテーマ重要
（理念・テーマ）
・地球貢献のテーマは何か
・健康？幸福？目標にはならない
・いのち輝く未来社会のイメージは　地球の完全な平和？
・調和→共生→自然の叡智→歴史を継承し発展するテーマ
（たとえばシンクローカル・アクトグローバルという環境哲学を）

（造園界からの勝手連的な提案を）

--個別と分断から再結集し全体構築する技術と思想を生かす--
・環境・防災・教育・交流・文化等の生活分野（足元）の提案
・安全安心の暮らしで貢献する造園の科学技術の未来を提示
・心の豊かさをもたらす会場空間の造園デザイン
・世界に通じる日本庭園の技術と思想の展開を図る
・これらを世界に次世代に伝える仕組み（体験空間・交流やまつり）